

あの町、この町へと作業しながらナホトカへと着く。

日の丸のついた高砂丸を見た時は本当に泣けた。

二十二年十月二十三日、舞鶴港に上陸後は京都・名古屋・長野県上山田と各国立病院に転送されて、二十三年十月頃に退院し、生まれ故郷へ帰ったが、妻は生死不明で、子供は避難途中で死亡した、と聞き、力が抜けるような気持、自分だけが生きて帰ってきたことに妻達に申しわけない気持で複雑だった。三年、四年と妻の消息不明のために身内から再婚のすすめもあつて、二十八年に現在の妻と再婚し、二人の内孫に恵まれ、幸福に余生を過ごしているが、今だに妻子の生死は不明である。二度と戦争を起こしてはならない。戦争ほど惨酷なことはないと。弱い者が一番、犠牲者となることを後世に伝えたい。

悲惨な五年の永い歳月の想い出

愛知県 橋本克己

昭和十七年、父は、食糧増産、北滿防衛という国策に従い、先祖伝来の故郷を捨て、家族七人を伴い、満州の龍江省甘南県大平山村三合屯東三河郷開拓団に入植した。

零下四十度のきびしい自然環境の中、風土習慣の異なる中、過酷な開拓が始まり、寸暇を惜しんで働きに働いた。ようやく軌道にのりかけ、広大な開墾地・牛・馬・豚等の家畜も増えかけた頃、北滿の地の果てにも、重く戦雲が垂れ始め、父にも召集令状が届き、あわただしく戦場に駆り出されていった。

やがて学校も閉鎖され、笑顔の消えた重苦しい日々が続き、ついに八月十五日無条件降伏の日を迎えた。翌日より地獄絵巻に等しい、苦難の逃避が始まった。弱い開拓農民を不幸のどん底へ引きずりこんでいっ

た。五族協和といえども、他民族の土地へ強引に踏みこんで渡満した開拓団は侵略者といえるだろう。その怒りが原住民の手に移った。多くの男手を召集で取られ、老・婦女子ばかりになり、丸裸同様な姿で、外地の真只中に放置された。なす術もなく迫害を受け生命を守るためのむなしい生活を余儀なくされた。

周辺の開拓団のようすが流言飛語となって伝わり、なおさら不安と恐怖が日増しにつのり、やがて現実となって開拓団の部落が襲われ、犠牲者が日増しに増えていった。開拓農民各自は日本の国策を遂行したことで、これが憎しみや恨みとなった。

日本が敗れ、無法状態の中で、積年の怨念が修羅の心と変わっても不思議ではない。連日といつてもいいほど、夜となく昼となく、匪賊の来襲が続いた。生命の存続のために、ひたすら無抵抗主義に徹するよりほかに術はなく、そのつど、金品を始め、衣料・食糧・家具・家畜等がつぎつぎと奪い取られていった。

幼い子供にも容赦なく、冷たい銃口が突きつけられた。僅かな抵抗が死につながっていった。身近な人の

殺傷の瞬間や縛られて連行されてゆく人、顔の見分けができないほどに暴行を受けた人等々、これが敗戦民族のたどる運命なのか、十歳そこそこの私には生涯忘れることのできない強烈な事実となって今も鮮明に残っている。

生気を失い、時の流れのまま、周辺の開拓団に身を寄せあいながら、二転、三転、凍りつく荒野を逃げ移り住んだが、どこも安住の地はなかった。暴民は巨大化し、行く先々の開拓団を襲った。生命の危機が常につきまとい、身の置きどころに窮した。

この地を生涯の故郷と定め、誓いあい、堅い絆で結ばれていた現住民も、夢を託して丹精をこめ苦勞して築きあげた開拓地とも悲惨な別れを告げ、離散し、生命維持に比較的治安のよい都会を求め、すこしでも祖国日本に近いチチハル市に向かった。

厳寒、雪中の十数日を要する徒歩であった。娘さんが奪取されることもあったが、反面、原住民の暖かい救いに守られてようやく市の收容所に落ち着いた。

人による迫害の被害は薄らいだものの、次の苦難で

ある病魔が待ち構えていた。中心街にある吉野屋収容所といえども、荒れ果て、不衛生この上ない状態の中で、発疹チフス・腸チフス等伝染病がみるまに蔓延し連日の如く死亡する者が続出した。

わが家でも弟、祖母があいついでもがき苦しみながら死んだ。食糧にもこと欠き、医薬もなく、病魔に冒され、一家が杖を並べて死期のくるのを待っている極限状態の中、忘れるに忘れない二十一年七月七日、父母が一時間の間に続いて死亡した。

悲しみを通り越して、涙すら出なかった。あの時、思いつきり声をあげて泣くことができたらと今でも思う。破れアンペラに包み、荒縄でからげて葬った。読経も線香も一輪の花もない野辺の送りであったと云っても、野原へ捨てるのである。野大やオオカミに喰われるのであろうが、どうしようもない。私と弟と妹が残されたが、私は幾度か死線をさまつたが、幸い生命をつなぐことができた。弟妹はことさら哀れだった、目鼻や身体から蠅の卵がかえり、うじ虫となって、這いでるあり様、かわいそうな短い一生を終えた。今も

ときどき夢で責められる。兄として何かできたのでは、……と。私は異国の地で孤児となってしまった。頼る人も物もない心の荒れた日々が重なっていった。皮肉にも家族の死後、一か月後、日本人の総引揚げが始まった。夢にまで見た懐かしい祖国にほんとうに帰れることになった。渡満して五年、それは筆舌につくし難い、悲嘆に暮れた年限であったと感じる。戦争による心の傷は深く、悲惨な忌まわしい思い出は、生涯消えることなく残るだろう。

しかし、悲惨な戦争の貴重な体験者の一人として、このことを後世に伝える義務を感じ、恒久平和と、人類共存共栄の実現の上に少しでも関わって生きて行くことが、多くの全て犠牲者に対する、冥福の祈りになることと信じる。改めて、再度こんな悲劇を繰り返さないことを願うものである。